

シュメール語文字史料から見た動物

前田 徹

Some Remarks on Animals in Sumerian Texts

Tohru MAEDA

今回、何か動物について話せとのことでしたが、考古学的に話すこと、たとえば、最近出版されました藤井純夫さんの『ムギとヒツジの考古学』のような、興味深い話をする能力はありませんので、日頃、シュメール語文献を読んでいて感じた、動物についてのいくつかの話をしたいと思います。そういう意味で、「シュメール語文字史料から見た動物」と題しました。取り留めもないことになりそうですが、1) シュメールの動物比喩、2) シュメールのことわざ、3) 小家畜と大家畜の区分、4) 牛と乳製品の納入、5) ブタ、6) クマの持参、この6つのトピックについて話します。このうちの二題、3) 小家畜と大家畜の区分、4) 牛と乳製品の納入は、これまでに論文に書いた内容からの話になります。

1) シュメールの動物比喩

動物と聞くと、最初に思い出されるのが、ハインペルの *Tierbilder in der sumerischen Literatur* という本です (Heimpel 1968)。『シュメール文学における動物表象』とでもなるのでしょうか、この本は、1968年に出版されており、私が大学3年生の時に当たります。いつ買ったのか、記憶にありませんが、たぶん博士課程に入ってからだと思います。この本は、シュメール語文学作品に現れた動物比喩を網羅したものです。シュメールの文学作品や王讃歌には、「羊のように無数にいる」のような比喩表現が頻繁に現れ、それらの表現を文学作品などを渉猟し、収集したのがハインペルの本です。

動物比喩の例をあげますと、

「雄牛のように彼のその日を壊しますように。野牛のように彼の恐ろしい角で搦め取りますように gu₄-gin₇ u₄-ne-na he₂-gaz, am-gin₇ a₂-hus-na he₂-dab₅」 (Gudea St B ix 6-9)。

「鶯のように、輝く山々を越える u₁₁-ri₂-in.musen-gin₇ 「kur₇-suba₄-kur₇-suba₄」 (Kutschner 1976)。

「ウルニヌルタよ、王侯権と英雄性を、野牛のごとくに、首に厚くする ⁴ur-⁴nin-urta nam-nir nam-sul-la am-gin₇ gu₂ he₂-ni-pes」 (Falkenstein 1950)。

「ウルクにおいて野牛のごとく、首を厚くし、クラブを、我が威光で覆う ki unu^{k1}-ga am-gin₇ gu₂ pes-ga₂, kul-aba₄^{k1} me-lam₂-mu dul₄-lu-da」 (Frayne 1998)。

最後の例である首を厚くするというのは日本語になつていません。太い首でそれらを支えるというような意味だと思いますが、意味内容を吟味することはこれからの課題です。動物比喩は、現在の常識で解釈できる場合はいいのですが、そうでなく、直訳しても意味を為さない場合もあります。意味を為さない場合は、無理をして即断することは禁物です。

ハインペルの本を手にした当時は、シュメール語の初步程度でしたから、彼の本を、すんなりと理解できるとはいきませんし、もとのシュメール語文学作品がすぐに手に入ればという願望、手に入れば入ったで、また、すんなり読めればと、羨望に近い溜息で眺めたものです。今もこの本を開くと一瞬にしる何とも言えない感情がよぎります。このハインペルの本では、動物と言っても、鳥、カエル、サソリ、そしてハエまでも加えておりまして、戸惑うこともあります。

2) シュメールのことわざ

動物は、比喩表現だけでなく、シュメールのことわざにも多く現れる。シュメールのことわざについては、ゴードンが1959年に出版しました (Gordon 1959)。当時知られていたことわざのすべてを集めたものではありませんし、この本には T. Jacobsen の増補が付いていまして、本編でゴードンが示した解釈を修正しています。さらに、書評において、その両者とも異なる解釈が示されたりして、ことわざの解釈がいかに困難かを思い知らされます。シュメールのことわざは、アルスターが1997年に2巻本を出版して、テキストの全体が分かるようになりました (Alster 1997)。

動物を主人公にしたことわざでは、現代人が動物に対して持つイメージとシュメール人のそれとが一致している場合は、ある程度解釈の妥当性が得られると思います。例えば、ライオンは百獣の王といわれますが、シュメールのことわざでも王や権力者のイメージで語られます。イヌは、少しトンマなところがあり、キツネは、知恵を働くかそうとするけれども小心で、権威あるものに弱い。イソップ物語によってよく知られたイメージでしょう。なお、鳥については、ブラックが論文を発表していますので、そちらを参照してください (Black 1996)。すこしライオンと関係する

ことわざを拾ってみました。〔〕括弧内は、警句や教訓としてとった場合です。あくまでも現代人の解釈で、シュメール人がそのように見たかどうか確認がありません。ことわざは、アルスターの本の118頁から119頁にありますYBC 4604から引用します(Alster 1997)。

ライオン ur-mah

ur-mah-e giš-gi₄-a, lu₂-zu-a-ni, nu-ub-ku₂: [i 4 (5.60)]
「ライオンは、草原で、彼が知る人を食べはしない。(知らない人を食べる。)」[権力者には昵懇にしておくのが得策]

ur-mah-e ša₃-ne-ša₄ im-[]-la, šu ba-ab-te-te: [i 6 (5.62) II 23-24]

「ライオンは、懇願を聞き入れる。(同時に)すべてを奪う。」[権力者を利用しようとして、利用されるな]

ur-mah-e nig₂-HAR-ra al-ku₂-e:[i 8 (5.64) 27]

「ライオンは粉にしたもの食べるだろうか。(あいつは肉食だ)」

ur-mah-e nam-lu₂-kurun-na, al-ak-e:[i 9 (5.65) 28-29]

「ライオンが、飲み屋の亭主になれるだろうか。」[気位の高い者が人の機嫌をとれるだろうか？]

ur-mah-e utul₂ mu-un-bil₂{ši-in}, a-ba nu-du₁₀-ga ab-be₂-e-še:[i 10 (5.66) 30-31]

「ライオンがスープ入れを熱くして(料理を準備して)いるところで、これはおいしくないと誰が言えようか。」[権力者に諫言は難しい]

igi ur-mab-a-ka, uzu al-ku₂-e:[ii 12 (5.68) 4-5]

「ライオンの前で、肉を食べる人」[無謀なことをするのは誰]

ライオンとイヌ

u₄ ur-mah-e, e₂-tur₃-ra-še₃, ur-gi₇-re eš₂-sig₂(?)-sur-ra i₃-mu₄: [i 1 (5.56)]

「ライオンが羊牧舎に近づくと、(護衛の)犬は、紡いだ羊毛を着る(隠れる?)。」

ライオンとオオカミ

ur-mah a-ne u₃-bi₂-te, ur-bar-ra mi-ni-ib₂-sar-re-en: [ii 13 (5.69) 6-7]

「ライオンが近づいてきたとき、おまえはオオカミを追いかく(?)もしくは、「ライオンが近づいたとき、オオカミよ、おまえは彷徨うことになろう。」[本当の権力者とは

誰]

ライオンとブタ

ur-mah-e šah-gis-gi₄ in-dab₅, e-ne gu₃ i₃-ra-ra, en-na-bi-še₃-am₃, uzu-zu ka-mu, nu-mu-ni-si, za-pa-ag₂-zu gestu₂-mu, u₂ ba-an-hub₂-e-še:[i 2 (5.57)]

「ライオンが茂みでブタを捕まえた。彼(ブタ)は鳴き叫ぶ。(そこでライオンが言うには)今まで、おまえの肉が私の口を満たしことはなかった。しかし、おまえの叫び声は(いつも)私の耳を(満たし)聞こえなくしたと。」

ライオンとキツネ

ur-mah-e, pu₂-nig₂-gir₃-a-ka u₃-mu-ni-in-še, ka₂-a ugu₂-bi-še₃, u₂-um-gin kuš-e-sir₂-zu, e₂(?) [x] gu₂-e-še₃, mu-e-si-tum₂-mu-um-e-še:[i 3 (5.58)]

「ライオンが井戸に落ちたとき、キツネが彼のところに来て言うには、私があなたのサンダルをあなたに替わって持って行きましょう。」[知恵を働きかけているようで、的はずれ]

オオカミ ur-bar

ur-bar-ra, he₂-KA-e, ḫutu igi i-bi₂-in-du₈, en-na teš₂ i-i-x, i₃-DIM₄(bulug₃)-e-[e]-še: [ii 15 (5. B 71) 10-14]

「オオカミが(何かを)唱えている。それをウトゥ神が見て言うには、今まで、そのように祈るのか。(オオカミが答えるには)(料理の)準備が出来るまで、(もしくは「肥えるまで」と。)」[現実にはありえない?]

われわれが抱く動物のイメージと一致するものとして、他にカバ、ハイエナ、クマのことわざがある。引用は、同じくアルスターの本からですが、ことわざ集第8とされる箇所からの引用です(Alster 1997)。それぞれのことわざに説明の必要はないでしょう。

カバ dim₃-šah₂

dim₃-šah₂-gin₇ še₁₀-da ka-ka-na al-sig₃: [SP 8 Sec.B 9]

「カバのように、彼の顔は糞尿まみれ」

カバと訳したdim₃-šah₂を「クマ」とする説もある(Sumerian Dictionary B p.151 “bear”)。ここでは、シビル氏の解釈を取った(Civil 1998: 13)。

ハイエナ kiri₄

kiri₄-gin₇ en-na nu-ni-hab₂-a nu-ku₂-e: [SP 8 Sec.B 15]

「ハイエナのように、(おまえは)悪臭を放たないものは食べない」

クマ az

az-e iti-6-kam-ma ti-na nu-bal-e, an u₃-sa₂ na-an-sum
-ma, ga₂-gin₇-nam he₂-si-ig: [SP 8 Sec.B 14]

「(冬眠で?) 6ヶ月間向きを変えなかったクマが言うには、天よ、眠り(大いなる眠り?)を与えない者は、まさに私のように衰弱してしまうだろう。(半年も寝て?)」

ネコについては、行政経済文書にも文学作品にもほとんど登場しないのですが、ことわざ集には出てきます(Alster 1997)。ここに示しましたことわざの中でネコがどのようなイメージで描かれているのかよく分かりません。現代語訳もまったくの仮のものです。

ネコ su-a

ab₂ 「su-a-gin₇」「egir₇」「lu₂」「gi (?)」「gur-da-ka al-du-un (5, 31)

「牝牛は、ネコのように、グル篭を持つ人の後を歩く」

umbin su-a i₃-udu(lib_x)-še₃ ba-an-ku₄ (SP 8 B 16)

「ネコの爪を羊の脂に入れる」

su-a-gin₇ kuš-du₃-u₃-bi eme-am₃ (SP 8 B 17)

「ネコが毛づくろいするような、(なめらかな)舌」

su-a ki-in-dar-ra mi-ni-pa₃-de₃ (SP 8 B 18)

「ネコは大地の裂け目を見つけられる」

su-a su-a-bi-še₃ ^dnin-kilim nig₂-ak-ak-bi-še₃ (SP 15 C 13)

「ネコはネコによって、マンガースはその為したことによつて」

最後に、カメ(nig₂-bun₂)のことわざを示します(Alster 1997)。

nig₂-bun₂-na lu₂ du₁₄ mu₂-a-ke₄ lu₂ har-ra-[an][gig-ga]-ke₄

「カメ、諍い好きが、行くところどこでも厄介を起こすもの」

このことわざは、カメの生態観察から来るというよりも、言葉の連想ゲームであると思われる。カメというシュメール語のニグブンのブンに、「打つ」とか、「変革」という意味があり(bun₂ CAD napāhu to blow, to hiss; nappahu revolution)、そこから「諍い好き」とされたのだと思います。

3) 小家畜と大家畜

話題を、ウル第三王朝時代の行政経済文書に移します。行政経済文書において、家畜は性や年齢によって区別され、しっぽが太いとかという形態の相違(品種の相違かもしれません)こうした区分で表記されます。エジプトでは、ヒツジやヤギを「小さなウシ」と呼ぶそうですが、シュメールでは、ウシで代表される大家畜と、ヒツジで代表される小家畜の二区分がありました。例えば、王宮の家畜管理人であった Puzur₄-^den-lil₂ が保有する(su-sum-ma)家畜の検査記録である CT 32, 38-40 の末尾に、

su.nigin₂.nigin₂ 101 gu₄-ab₂-hi-a

総計101頭の各種の牡牛と牝牛

su.nigin₂.nigin₂ 3241 udu-maš₂-hi-a

総計3241頭の各種のヒツジとヤギとあるように、ウシを大家畜、ヒツジとヤギを小家畜として区分しています。

しかし、同じドレヘム文書の家畜の支出文書 PDT 1, 527 に見るように、ヒツジとヤギを総称して、ヒツジ=小家畜と呼ぶ場合もあった。

su.nigin₂ 2 gu₄ 1 dusu₂,

合計 2 頭の牛、1 頭のロバ

su.nigin₂ 12 udu-niga, 12 udu

合計12頭の飼料で養うヒツジ、12頭のヒツジ

su.nigin₂ 11 sila₄ 10 sila₄-nu-a

合計11頭のメスヒツジ、10頭のメスヒツジ

su.nigin₂ 12 maš₂ [] maš₂

合計12頭のヤギ、[] ヤギ

su.nigin₂ []

合計 []

edge: 2 gu₄ 1 dusu₂, 52 udu

2 頭の牛、1 頭のロバ、52頭のヒツジ

ウシやヒツジのようなシュメール人が飼育する家畜に対して、野のけものは、maš₂-anše(ヤギとロバ)で総称されます(cf. CAD B būlu)。「エンキ神と世界秩序」と題された神話に次のような文章があります(Enki and the World Order, ll. 131-132=248-249)(Benito 1969)。

「(マルトゥは)町をつくらず、家を造らない者。エンキ神は、(その)マルトゥに野の生き物(ヤギとロバ maš₂-anše)を贈り物として与えた。uru nu-tuk e₂ nu-tuk-ra, ^den-ki-ke₄ mar-tu maš₂-anše sag-e-es mu-ni-rig₇」

gu₄-udu でなく、maš₂-anše の語を使用したのは、遊牧的なマルトゥは、文明を享受するシュメール・アッカドの民とは異なるという意識が働いていると思われます。

4) 牛と納入品

シュメール人は、遊牧民がロバとヤギを飼育する民であるのに対して、ウシとヒツジの飼育とその活用が、オオムギを中心とした農業とともに社会に欠かすことのできない生産形態であると、考えていたようです。牛の飼育がどのようになされてきたかを、今から約25年前になりますが、初期王朝時代ラガシュの文書を、牛飼いの分担制度から検討した論文を発表したことがあります(前田 1977)。搔い摘んで要点を述べますと、初期王朝時代のラガシュの支配者妃の組織には、3種類の牛飼いがいた。第一が、牛飼い(ウヌ unu₃)と呼ばれる職種で、彼らは、牝牛と牡の若牛(1~3才)、それに種牛を保有し、飼育した。彼らは子牛の繁殖を管理し、また乳製品を納入するのが役目であり、成牛の乳牛1頭当たり、定額のバターとチーズを納める義務を負っていた。生まれた子牛が牝であればそのまま飼育し、乳牛にまで育成した。生まれた子牛が牡であれば、1才になるまで飼育し、1才牛に達すると第二の牛飼いに手渡した。第二の牛飼いは、「若牛の牛飼い」と呼ばれており、牡の若牛のみを飼育し、成牛を飼育しない。彼らは2~3才の若牛を飼育し、耕作に耐え得る成牛にまで育成して、そのうち第三の牛飼である「農夫」に手渡した。若牛の牧夫が牛の去勢を行ったと思われる。農夫は成牛に犁を牽かせて、穀物畑の仕事に従事した。

このように、支配者妃の組織では、牛は耕作に使用する役牛としての役割と、乳製品の原料となる乳を産出する役割が期待されました。食肉用としての用例は少なく、祭などで共食する程度で一般化していなかったと思われます。

今述べたように、初期王朝時代のラガシュでは、乳牛1頭当たり、バター(i₃-ab₂)10シラ、チーズ18シラの定額納が一般的でした。時代が下ったウル第三王朝時代においても、バター5シラ、チーズ7.5シラが量られ、初期王朝時代とは異なる量ですが、定額納であることには違いがなかった。こうしたことを探しましたが、定額納に関して、この論文に注をつけました。注13ですが、引用します。「牛乳(i₃-ab₂)の納入はDP276に、チーズ(LAK490)の納入はDP274に記録される。この二文書を、DP93と対比し、乳牛1頭あたり牛乳10シラ、チーズ18シラの定額になることを明らかにしたのはダイメルである(Or.21,11)。ウル第三王朝時代も乳牛1頭当たり定額であることに就いては、ゲルプの文献を参照されたし(Gelb 1967)。但し、ゲルプのTCL II 5499文書の解釈には注釈を要する。ゲルプはこの文書について次のように記述する。「最初の4年間、1頭の牛についてバター5シラ、チーズ7.5シラであり、まさにUET III 1215, 1216文書に記された量と比に一致する。次の6年間に産量は漸次減少する。しかし、バターとチーズの産量比は1対1.5に一定である。」後半6年間にバターとチーズ

の比を求めたのは、1頭当たりの産量に変動があり、定額納の値を採らなくなるからである。定額値をバター・チーズの比1対1.5に求めるためであろう。しかし、乳牛数を前年に採ると1年目から10年目までのいずれもバター5シラ、チーズ7.5シラの値になる。」

この注の続きは略しますが、問題にした文書TCL II 5499について、エングランドが作成した図を末尾に挙げておきました(図1)。チーズ、バターの納入額を決める牛の頭数は、当該年でなく前年に採ることを指摘したのですが、この指摘を、五味亨さんが、英語の論文で引用され(Gomi 1980: 1, no.3)、それを読んだエングランドが、この文書の再解釈に際して引用し、前田のいうことは正しいと言っています(Englund 1995: 389)。しかし、続きがあります。前田は、この文書を経済文書と考えているようだが、そうではなく、机上の空論を書いた教材の様なものであることを見落としている、と。ショックでした。確かに、成牛の半数の子牛が生まれ、途中で病気などで失われることのない点から見て、実際の飼育とは無関係かもしれません。こうした問題があることを、論文を書いた時点では全く気づきませんでした。脱帽です。

脱帽したままでは、芸がありませんので、何とか反論するところがないかと考えています。エングランドの説で、最初、疑問に思ったのは、書記学校において生徒の手本となる教材が作成されていたことは事実でしょうが、ウル第三王朝時代にこのような完全な教材は他に無い。あるとすれば、例外的な粘土板になります。そこに、教材と断定する前にもう少し考える余地があると思いました。

この粘土板文書の内容を再確認します。この文書が記録するのは、牛の頭数と、バター、チーズの拠出量であり、それについては、エングランドが作成した図が要を得て図示されていますので、それを見てください。文書の最末尾に合計の項目があります。その部分を訳しておきます。
su.nigin₂ 18 ab₂-hi-a

合計 18頭 各種の牝牛

su.nigin₂ 14 gu₄-hi-a

合計 14頭 各種の牡牛

su.nigin₂ 0.4.3. 5 sila₃ i₃-nun

合計 275シラのバター

su.nigin₂ 1.1.5. 2 1/2 sila₃ ga-ar₃ gur

合計 412 1/2シラのチーズ

ku₃ i₃-ba 1/3 ma-na 7 1/2 gin₂

そのバターの銀(代価)は27 1/2 ギン

ku₃ ga-ba 2 2/3 gin₂ 15 se

そのチーズの銀(代価)は495シェ

nig₂-SID-ak i-du-a dumu i-zu-a-ri₂-ik sanga ⁴istaran
イシュタラン神の最高神官イズアリクの子イドゥアの

(財産) 会計簿

牛の合計、18頭の牝牛と14頭の牡牛は、この記録の最後の年シュルギ48年の分をまとめて再録したものです。当然です。「義経11歳の時の頭蓋骨」は無いわけですから。バターとチーズは、シュルギ39年から48年までの各年の拠出額を合計した数値です。そのバターとチーズについて、銀で価格を評価するのが次の項目で、バターは10シラで銀1ギンの計算であり、チーズは、1シラで銀1 1/5シェの計算になります。チーズ10シラですと銀12シェ=1/15ギンです。チーズはバターの15分の1の価格になります。ストールは、ここで言うチーズとは現在の西アジアでいうところの *kis k* に該当し、攪拌後の残りから造られたとしている(Stol 1993: 101)。バターに比べて安価であってよいわけです。

最末尾に「イシュタラン神の最高神官イズアリクの子イドゥアの会計簿」とありますから、この記録は、牛飼いの会計簿ではありません。イシュタラン神はデール市の都市神ですが、ブズリッシュ・ダガーンやニップルに神殿を持っていましたか分かりません。イシュタラン神の最高神官イズアリクとその子イドゥアについても、関連文書を見つけていません。最高神官の子は、父を継いで最高神官職になるはずで、子とは、親子関係を示すと同時に、神官職を補佐する役割をも意味します。このイドゥアが有する、もしもくは、イシュタラン神殿が所有する家畜と乳製品の記録であるわけです。実際の飼育は牛飼いが行っていたはずですが、牛飼いの名はこの文書に出てきません。

少し話がずれますが、ウンマ市にあった、保護神としての王アマルシンを祭る神殿の所属員 (*gir₃-se₃-ga ^dlama ^damar-^dsuen*) の記録があります(AAICAB I, 2, 1971-371)。

2 <i>guruš guda₄</i>	2人 グダ神官
2 <i>guruš muhldim u₃</i> <i>ninda-du₈-du₈</i>	2人 料理人とパン製造人
2 <i>guruš lu₂-šem</i>	2人 ビール醸造人
3 <i>guruš šu-ku₆</i>	3人 漁師
1 <i>guruš mušen-du₃</i>	1人 鳥追い
1 <i>guruš u₂-il₂</i>	1人 草献上人
1 <i>guruš bahr₂</i>	1人 陶工
1 <i>guruš ga-il₂</i>	1人 バター献上人
1 <i>guruš sipa-udu-niga</i>	1人 肥肉羊の牧人
1 <i>guruš muš-laḥ</i>	1人 蛇使い
1 <i>guruš kisal-luh</i>	1人 庭清掃人
1 <i>guruš i₃-du₈</i>	1人 門番
2 <i>geme₂ kikkin-na zid₂-da</i>	2女人 穀粉所
1 <i>geme₂ a-ga-am</i>	1女人 アガム所
5 <i>nar-nita</i>	5人 聖歌僧
10 <i>nar-munus</i>	10人 聖歌尼僧

gir₃-se₃-ga ^dlama ^damar-^dsuen-ka

構成員を見ると、ヒツジの牧夫はいるが、牛飼いがいません。代わりにバター献上人が存在します。草献上人からの類推で、彼は神にバターを捧げる役でなく、バターをこの組織に納入する者でしょう。牛飼いでなく、バター献上人とあることが注目されます。牛の飼育が請負制であったとする根拠にもなりましょうし、牛の活用が乳製品に限定されていたとも類推できるからです。イドゥアの会計簿も、乳製品が中心になっています。一方、神に牛の犠牲を捧げることは最高の儀式であり、犠牲に供される牛は、王や都市支配者から献上されました。神殿組織で飼育する必要はないわけです。

さて、請負契約による家畜飼育は、メソポタミアで行われており、ウル第三王朝時代では、*šu-la₂*と呼ばれるのがそれに当たると考えられます(cf. Maeda 1989: 86)。そうするならば、イングランドがこの文書を教材と推定した根拠である、現実に起こりえない家畜の計算、それは、請負契約の契約内容ではないでしょうか。

牝の成牛1頭につき、1年にバター10シラ、チーズ18シラの納入。牝の成牛の頭数に2分の1を掛けた数の子牛を登録。成牛が奇数であれば、小数点以下を切り捨て(シュメール人は小数点など知りようもなかったでしょうが)、たとえば、牝の成牛5頭であれば、4頭として、産まれた子牛として2頭を登録する。その場合子牛は牝牛同数とする。2頭であれば牝1頭、牡1頭。奇数であれば、どちらかが1頭多くなるが、初年度では牡牛を多くし、次年度では逆に牝牛を多く取り、通年では同数になるようにする。こうした規則があったと思われます。

イングランドが作成した図を見ていただくと、8年目のところで、子牛は牡牛2頭、牝牛1頭と書かれています。それをイングランドは注記して「4頭の子牛とあるべきところを3とするが、誤記か!」としています。彼は、成牛の半数と同等の子牛が記載されることを知っています。この8年目では、本来あるべき2頭の牝牛より1頭少なく1頭の牝牛だけが記録されたことになります。次に、10年目を見ますと、牝の成牛が10頭いますから、子牛は5頭です。ところが、先に示した基準では、子牛が奇数の場合、最初の年は牡牛を1頭多くするという原則があります。それに反して、ここでは、牝が3頭、牡が2頭となっています。基準より牝が1頭多くなります。8年目に牝1頭少なかつた分を、ここで補ったと考えることができます。

このような基準は、架空の数値でなく、請負契約の契約内容と捉えれば、8年目と10年目の説明もできることになります。つまり、この文書はやはり経済文書であって、それも牛の所有者と飼育人との間で取り交わされたであろう

請負契約の内容を知りうる貴重な文書の可能性が高いということです。これはなお、他の時代の請負制度との比較など詰めなければならない点が多くありますが、すくなくとも、虚構の作品として捨ててしまうのではなく、当時の時代を知るためにこの文書はどのようなことをわれわれに教えてくれるのかを追求する必要があるということです。シュメールは古代にしては史料が多い時代といわれています。それは比較の問題で、当時を知るための史料は絶対的に不足していることには違いないのですから、貴重な史料を読み込むことが要求されるのです。

この文書が真正なイドゥアの会計簿であるならば、もう一点注目される記述があります。バターやチーズの価格を銀で表示することです。この文書が書かれたのは、牛飼いに請け負わせた牛で、イドゥアの、もしくは神殿の所有に帰する頭数と、それらの牛から納入され、イドゥア、もしくは神殿の権利となる乳製品の量を記載することが目的でしょう。バターとチーズは現物納であるはずですから、銀で価格を表示する必要はないわけです。なぜ、表示したのか。結論は得られませんが、可能性として3点挙げることができます。第一に、10年間乳製品納入が実施されていくなくて、最終年である48年に、牛飼いから、まとめて銀で納入されることになった；第二に、乳製品の納入に際して、牛飼いと所有者であるイドゥアの間に商人が介在し、商人が乳製品に見合う銀を牛飼いに代わって納めた；第三に、銀で表示することは、銀で価格が定まる他の物品との交換が可能になることであり、他の物品との交換を目的として、銀で表示した。つまり、財産を銀で統一的に評価した。このほかにも可能性があるでしょうが、この中では第一の解釈がもっとも有望ではないかと思われます。

5) ブタ

われわれはブタ肉を愛用していますが、西アジアではタブーになっています。豚肉の禁忌がいつ始まったのか難しい問題があるようですが、ここでは言及しません。シュメールの行政経済文書において、ブタの飼育とその利用について、特色といえる点を指摘するにとどめます。

ブタは、シュメール語で *sah₂* であり、その他に *sah₂-tur* 「子豚」、*sah₂-giš-gi* 「アシの茂みのブタ」などが経済文書に現れます (CAD S *sahā* pig; CAD K. *kurkizannu*, *kurkuzannu* piglet, yong pig. CAD S *sahapu* (*sah api*, *sahhapu*) marsh boar)。

ブタの飼育人は、シュメール語で、*sipa-sah₂* であり、牛飼いや羊飼いと同様に、シパと呼ばれています。初期王朝時代ラガシュにおいて、支配者妃の組織には、牛飼いや、羊飼いとともに、ブタ飼いもいました。このブタ飼いが他の牛飼いや羊飼い、ロバ飼いと異なるところは、ブタ飼い

の下には牧童でなく、女性労働者がいたことです。支配者妃の組織では、毎月定期的なオオムギ支給があり、その記録に「食用ブタ（を飼育する）女労働者たち、（その長は）ブタ飼いのルガルパエ *geme₂ sah₂-nig₂-ku₂-me, lugal-pa-e₃ sipa-sah₂*」とあり、確認されるのです。ブタの飼育に女性が関わることが、他の牧夫と異なるのです。

牛、羊、ロバなどは、家畜舎に囲われるか、野に放牧されるかですが、ブタの飼育は、女性労働者が家内労働として厨房や織物工房で働くように、家内的な仕事の延長として把握されていたのでしょう。ウル第三王朝時代のラガシュ文書に、穀粉所のブタ (= 穀粉所で飼育されるブタ) の会計簿があり (*nig₂-SID-ak šah₂ ša₃ e₂-kikkin₂* : TCTI 2, 2807)、女性労働の延長で捉えられている好例です。この文書で、ブタは、各種労働者の食用や、イヌの飼料 (*ur-re ku₂-a*) として支出されています。

食用のブタと明記されること、食用として支出される例が文書から確認されるので、シュメールではブタは確かに食べられていました。食用ブタについてウル第三王朝時代の例をもう一例引いておきます。「1頭の牝のノブタ、王妃の食用として *1 šah₂-izi-tur-munus-giš-gi nig₂-ku₂ nin-ga₂-še₃*」 (TCNSD 188)。

ブタは、食用であるとともに、油の利用が目立ちます。ウル第三王朝時代の行政経済文書には次のような例があります。

「ブタの脂、病人であるエラム（出身の）女奴隸を塗油するために。ビール、病人であるエラム（出身の）女奴隸に、飲ませるために *i₃-sab₂ geme₂ NIM tu-ra šes₄-de₃, kaš-dag geme₂ NIM tu-ra nag-nag-dam*」 (TYBC 1720)

病気になった女奴隸に、治療のためでしょうが、皮膚に塗る油としてのブタの脂と、飲み物としてのビールが支給されたのです。

「パンとブタの脂：ウンイルと兵士達が食べ、そして塗油した *ninda-dag, i₃-šah₂ : un-il₂ u₃ erin₂-didli ib₂-ku₂ ib₂-še₄*」 TYBC 1823 (SS 7 Um i)

「ブタの脂：衣料支給を受けるウンイルが塗油した *i₃-šah₂, un-il₂ tug₂-ba ib₂-še₄*」 TYBC 1704 (SS 6 Um viii)

別の文書では、ゴマ油をルクル神官達へ、豚の脂を、シャラ神とシュルギ神の聖歌僧に支給しています (MVN 16 1127)。高級神官であるルクルには高価なごま油を、それより下級の聖歌僧には豚の脂を支給したのでしょう。陶工への油支給として、豚の脂が支給された記録もあります (UTAMI 3 2065)。

次に示す文書では、野外で働く女性労働者に、パンと油が支給されています。

「268シラのパン、18シラの豚の脂、大麦の収穫作業に行く

女性労働者とその子へ 0.4.2. 8 sila₃ ninda gin, 0.0.1 8 sila₃ i₃-sah₂, IGI.KAR₂ geme₂-dumu, še gis-ra-ra-de₃ gin-na」(TYBC 1737)

労働時に直射日光を避けるために体に油を塗ったのでしょうか。直営地耕作に従事するヌバンダグを長とする集団が、ブタを購入するための大麦を受領する記録があります(UDU 088)。耕作集団がブタを飼育していたのであり、その飼育目的は、労働時に体に塗るための油を補給することであったと思われます。

その他に、革鞣し工が豚の脂を受領する例があり(SANTAG 6, 355、SNS 368)、油剤として利用されたのでしょう。

このように、ブタは、その飼育が女性労働に依存する面があり、ウシやヒツジの牧夫とは相違します。その利用についても、確かに食用に供されることがあったにしても、むしろ脂の利用が進んでいたと思われます。

6) クマ az

最後の話題に移ります。クマの話ですが、その前に、ウル第三王朝時代、ヒツジ・ヤギの小家畜と牛などの大家畜が、西は地中海岸地域から東はエラム地方まで、支配が及ぶ各地から貢納されていた。その集積所がニップル市近郊のブズレシュ・ダガンにあった。家畜の一大集積地・管理地となったのは、シュルギ王の年名「ブズレシュ・ダガンにシュルギ神殿を建てた年」もしくはより簡略に「ブズレシュ・ダガンの神殿を建てた年」にある通り、39年からと思われます。この集積所が一年間に扱った家畜は、牛などの大家畜と羊・山羊などの小家畜を合わせて、約6～8万頭でした。[AO 19548 (Calvot 1969: 102), AO 19550 (Calvot 1969: 104)]

ドレヘム文書に記される持参家畜は牛やヤギ・ヒツジを中心ですが、ろばなども持参されています。熊(az)と小熊(amar-az)もその例に入る。クマは、神々への犠牲にはなりませんで、道化師(u₄-da-tus)が引き取り、芸をさせたようです。多く小熊(amar-az)が持参されたこともそうした理由によるのでしょうか。

クマの持参を問題にするのは、次のような理由によります。ウル第三王朝第四代の王シュシンは、アマルシンの王位を奪って即位した王です。シュシンは、王になる前に、王族将軍としてデール市に滞在していた。このデールは新アッシリア時代に至るまでメソポタミアからエラムに通ずる道の要衝であり、軍事上の要点であるので王族将軍が派遣されたと思われます。王族であるシュシンもまた将軍としてデールに駐在したというのが従来の考え方でしたが、ミハロスキが、シュシンが駐留したのはデール(BAD₃.AN^{k1})ではなく、ウル市近郊のドゥルム(BAD₃^{k1})であると

する新説を提案しました。それを批判する根拠として、このクマの持参があると考えたからである。

クマの持参者は限定されます。

シマヌム si-ma-nu-um^{k1}の人〔=支配者〕 a-ri-ib-a-tal: MVN 13, 710 (S 45 xii 24)

同じくシマヌムの人 bu-ša-am: SET 91 (SS 5 xi 16)

キマシュ ki-maš^{k1}の人 i-sar-a-li₂-iš-su₂: CTOI 1, 273 (S 47 ii 15)

バドアンキジ bād-an-ki-zi^{k1}の軍団長 AN-li-ni: SET 10 (AS 5 ix 11)

ハルシha-ar-ši^{k1}の人ša-lu: TRU 30 (S 46 i 13)

アシュル as-sur_x^{k1}の人 za-ri₂-ik: Amorites 18 (AS 5 xii 22)

文書には明記されないが、他の文書からシムルムの支配者 ensi₂ si-mu-ru-um^{k1}と確認されるse-lu₂-us₂-da-gan: CTOI 1, 152 (S 43 vi 4), MVN 8, 195 (SS 9 xi 18)

同じく、文書には明記されないが、他の文書から、周辺地域に駐屯する軍団の長sagina であることが確認される者たち:

ba-ba-an-še-en: DC 1,237 (AS 4 xi 20)

e₂-a-i₃-li₂: AUCT 2,214 (S 47 xi 23), TRU 109 (S 47 xii 8), PIOL 19,240 (S 48 x 10)

bu-ba-a: PDT 408 (S 46 ix 7)

その他に、イルムとザバルダブもクマを持参する。

ir₁₁-mu: TRU 309 (AS 3 xii 7), PDT 2,1285 = TRU 311 (AS 4 xii 20)

zabar-dab₅: TRU 110 (S 47 xii 4)

この二人は周辺地域に派遣される伝令 sukkal を統括していたと思われます。

このように、クマは周辺地域から持参されるのであり、シュメール・アッカドの諸都市からの持参の例がありません。

デール市(ミハロスキはウル近郊のドゥルムと考えるのですが)に駐留した王族将軍がクマを持参する例を示します。

王子ウルスエン ur-^dsuen

彼がデール駐在の将軍であることは、彼の部下マシュムの円筒印章銘から確認されます。

seal: ur-^dsuen/ šagina/ unu^{k1}-ga// u₃ BAD₃.AN^{k1}/ ma-[sum]/ ir₁₁-zu/ TrDr 74 (AS 1 i)

ウルスエンは、ロバをデール市から持参しています(PIOL 19, 228)。クマの持参は次のような文書で確認されます。

CTOI 1, 293, 294([]), CTOI 1, 147 1 (S 43 i 14), CTOI 1, 173 (S 44 i-min 14), Dhorme RA 9,57: AM 1 (S 44 x 23), MVN 13, 116 (S 45 x 16), TRU 34 (S 46 xi 27),

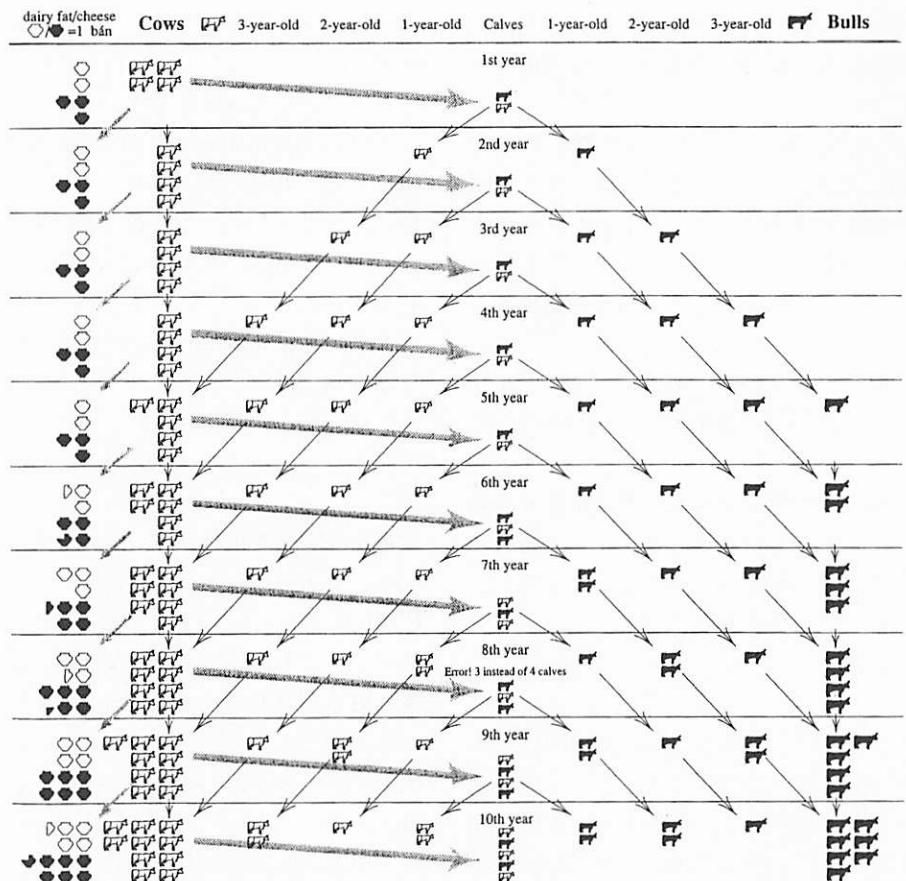


Figure 78. The growth of cattle herd according to the text illustrated in figure 76.

(Englund 1993 : 101)

5490 F.



5490 R.

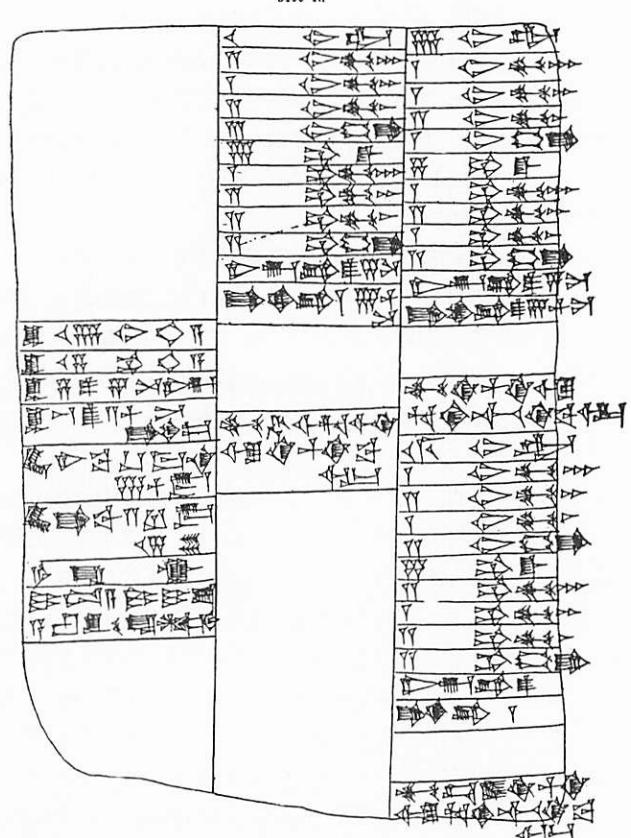


図1 TCL II S499 乳牛飼育と納入乳製品

AnOr 7, 151 (S 46 xi), CTOI 1, 191 (S 46 xii 5), CST 152 (S 46 xii 25) = amar-anse??=amar-az, Holma 24 (S 47 i 3), AUCT 2, 214 (S 47 xi 23), Or 18, 12 (S 47 xi 28), CTOI 1, 267 (S 47 xii 10), CTOI 1, 268 (S 47 xii 12), MVN 5, 109 (S 48 x []) = amar-anse??=amar-az

次に、王の子である a-*hu*-ni がクマを持参する例は、BIN 3, 224 (SS 2 ix 10) にあり、彼がデールに関与するのは、デールのムシュケヌムからの持参物を監督していることから明らかです：YBC 12565 (Michalowski 1977: 296) gir₃, MAŠ₂.EN.KAK BAD₃.AN^{k1}-me

さて、王の子であるシュシンも、彼の部下であるシュルギイリの円筒印章銘からデールの将軍であったことが明らかで (su-^dsuen/ šagina BAD₃.AN^{k1}/ ^dsul-gi-i₃-li₂/ dub-sar// []/ir₁₁-zu/ : Michalowski, Mes.12, A)、デールからの持参物が彼からもたらされるという、デールとの直接的な関与を示す文書も存在します (PDT 171)。このシュシンがクマを持参する例は、アマルシン 1 年から 6 年までです。

MVN 8, 123 (AS 1 xi 16), Michalowski, Mes. 12, p.95 (AS 3 xii 4), MVN 11, 182 (AS 4 x), AUCT 1, 944 (AS 4 x2 13), MVN 11, 140 (AS 5 ix 9), TCSD 113=TCNSD 246 (AS 5 ix 27), Nik 2, 476 (AS 5 ix 29), PIOL 19, 5 (AS 5 x 6), TCNSD 70 (AS 5 x 19), Nik 2, 459 (AS 5 xi 9), TrDr 13 (AS 6 x 27), PDT 2, 1357 ([])

このように見えてくると、ミハロスキが従来の説であるデールをドゥルムに置き換えたのは、やはり無理があり、従来通り、エラムとの境になっており、戦略上重要なデールに王族將軍が派遣されていると考えた方が、齟齬がありません。そのことをクマの持参が端的に示すのであります。

ウル第三王朝時代の国政の問題をクマで解決しようなんて、と呆れ顔で言われたことがあります。しかし、少ない史料をどのように利用するか、それについてはあまり常識的に判断するよりも、貪欲に、何でもありと考えて、史料を見る方が理にかなっていると思います。常識が無いと言われています私の言うことではないかもしれません。話を終わらせていただきます。ご静聴ありがとうございました。

本稿は、執筆者より講演録形式でご投稿頂きましたので、そのままの体裁で掲載させて頂きました。

引用・参考文献

- Alster, B. 1997 *Proverbs of Ancient Sumer*. vol. 1 and 2. Bethesda, Md, CDL Press.
- Benito, C. 1969 "Enki and Ninmah" and "Enki and the World Order". Ph.D. dissertation. Pennsylvania, University of Pennsylvania.
- Black, J. 1996 The Imagery of Birds in Sumerian Poetry. In M.E. Vogelzang and H.L.J. Vanstiphout (eds.), *Mesopotamian Poetical Language: Sumerian and Akkadian*, 23-46. Groningen, Siyx Publications.
- Calvot, D. 1969 Deux documents inédits de Šellus-Dagan. *Revue d'assyriologie et d'archéologie orientale* 63: 101-114.
- Civil, J. 1998 "Adamun", the Hippopotamus, and the Crocodile. *Journal of Cuneiform Studies* 50: 11-14.
- Englund, R.K. 1995 Regulating Dairy Productivity in the Ur III Period. *Orientalia* 64/3: 377-429.
- Englund, R.K., Nissen, H.J. and Damerow, P. 1993 *Archaic Bookkeeping: Early Writing and Techniques of Economic Administration in the Ancient Near East*. Chicago, University of Chicago Press.
- Falkenstein, A. 1950 Sumerische religiöse Texte. *Zeitschrift für Assyriologie und vorderasiatische Archäologie* 49: 80-150.
- Frayne, D.R. 1998 New Light on the Reign of Ishme-Dagan. *Zeitschrift für Assyriologie und vorderasiatische Archäologie* 88: 8-19.
- Gelb, I.J. 1967 Growth of a Herd of Cattle in Ten Years. *Journal of Cuneiform Studies* 21: 64-69.
- Gomi, T. 1980 On the Dairy Productivity at Ur in the Late Ur III Period. *Journal of the Economic and Social History of the Orient* 23: 1-42.
- Gordon, E.I. 1959 *Sumerian Proverbs: Glimpses of Everyday Life in Ancient Mesopotamia*. Philadelphia, University Museum, University of Pennsylvania.
- Heimpel, W. 1968 *Tierbilder in der sumerischen Literatur*. Studia Pohl 2. Roma, Pontificium Institutum Biblicum
- Kutscher, R. 1976 Utu Prepares for Judgement. In B.L. Eicler (ed.), *Kramer Anniversary Volume: Cuneiform Studies in Honor of Samuel Noah Kramer*. Alter Orient und Altes Testament Bd. 25. 305-309. Kevelaer, Butzon & Bercker.
- Maeda, T. 1989 The Puzris-Dagan Organization for Cattle management in the Ur III Dynasty. *Acta Sumerologica* 11: 69-111.
- Michalowski, P. 1977 Ur III Topographical Names. *Oriens Antiquus* 16: 287-296.
- Stol, M. 1993 Butter and Cheese. *Bulletin on Sumerian Agriculture* 7: 99-113.
- 前田 徹 1977 「Sipa-amar-SUB-ga について—エミの牛飼の職業分担—」『古代文化』第 29 卷第 2 号 1-12 頁。

前田 徹
早稲田大学文学部
Tohru MAEDA
Waseda University